滑稽俳句と川柳（一）

秋尾　敏

過日、八木健翁より『八木健の滑稽俳句一〇〇（三十年間の三万句から)』と『八木健の川柳一〇〇句』が送られて来た。どちらもＡ３の一枚摺である。

かねてより俳句と川柳の違いについては頭を痛めてきた。すでに二度ほど川柳の会に呼ばれ、俳句と川柳の違いを話したことはあるのだが、昨今の多様になりすぎた俳句を前に、川柳との違いを定義することはますます難しくなっている。まして、「滑稽俳句」ということであれば、どうやって川柳と区別すべきなのであろうか。

しかし、今回送っていただいた八木翁の句集には、その二種が明確に峻別されているように感じられた。翁は、川柳と俳句の違いを正しく捉えておいでのようだ。それぞれ冒頭の三句を読んだだけでも、それはよく分かる。

【俳句】

秋田小町コシヒカラせて稲を刈る

アイロンをかけハンカチの過去を消す

穴だけの眼に睨まれて目刺食ぶ

【川柳】

あの世にはもって行けない金を貯め

カラーと言わず総天然色と言う頑固

この家で一番正直なのが鏡

まず、明らかなのは、俳句が〈自他場〉それぞれの句を網羅しているのに対し、川柳のほとんどが〈他〉の句だということである。〈自他場〉というのは連句用語で、それぞれ、自分を詠んだ句、他人を詠んだ句、人ではなく場を詠んだ句の三種を言う。

私自身の理屈づけによれば、俳句が、語り手の肯定し得る価値を詠もうとする

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

のに対し、川柳は、いささか差別的に他者の問題点を詠むことが多い。したがって、川柳に他の句が多くなるのは必然ということになる。八木翁は、ほぼこの原則に従っておられるように思う。

ただし、これには読み手の意識の問題もあって、

スクワットして関節に油差す

などは、川柳と言われるから他の句として読んでしまうのだけれど、これを無季の滑稽俳句として提示されれば、自の句として読むのではないかと思う。

しかし、次の句を説明するのは難しい。

尻に火がついても蛍慌てない

これは人間の出てこない場の句だが、擬人法であるから、他の句と読むこともできる。これも読みようだが、蛍の長所を詠んでいると考えると、理屈の上では滑稽俳句ということになる。しかし、直観的に言ってこの句は間違いなく川柳である。これを俳句だと言って示されたら、私は評価しない。川柳だからおもしろいのである。それはなぜか。

二つ目の理屈づけをすると、対象の一般的な特質を知的に把握すると川柳になる。この句は蛍の性質を知的にとらえているから川柳である。それに対して俳句は、対象との一期一会の出会いを主情的に捉えようとするように思う。

しかし、俳句と川柳は、そもそもは同じものである。よく、俳句は発句で川柳は平句（付句）だなどと言われるが、そうとばかりは言い切れない。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。